なくなった人形

小川未明

青空文庫

冬でありましたけれど、その日は、風もなく穏やかで、日の光が暖かに、門口に当たっていましたので、おみよは学校から帰りますと、ござを敷いて、その上で、人形や、おもちゃなどを出してきて遊んでいました。すこし前まで、近所のお友だちがきて、いっしょに遊んでいたのですが、お友だちはちょっと用ができて家へいったので、後には、まったくおみよ一人となったのでした。けれども、彼女はすこしもさびしいとは思いません。かわいい人形がそばにありますから、それを抱いたり、下にすわらせたり、またそれにものをいったり、おもちゃのお膳や、茶わんや、さらなどに、こしらえたごちそうを入れて、供えてやったりしていますと、けっしてさびしくもなんともなかったのであります。

その人形は、今年の春、田舎から叔父さんが出てこられたときに、叔父さんといっしょに、町へいって買ってもらった、好きな、たいせつにしている人形でありました。

日は、だんだん西の方へまわりましたけれど、まだそこには、暖かな日が当たっていました。

「さあ、こんどはなにをおまえにこしらえてあげようかね。」と、おみよは人形に向かって、独り言をもらしたのです。

そのとき、あちらのさびしい路のほうから、こちらにやってきた、哀れなふうをした、七つか八つになったくらいの乞食の女の子がありました。どこへゆくのでしょうか、ふと、この家の前を通りかかりましたが、乞食の子は、おみよが、いま人形にごちそうをこしらえてやろうとして、菊の花や、山茶花の花弁を、小さな刃物で、小さなまないたの上に載せて刻んでいるのを見て、思わず歩みを止めて、しばらく我を忘れてじっとながめていました。

乞食の子は、まだ産まれてから一度も、そんな美しい人形や、おもちゃ道具を手に持って、遊んだことがなかったのです。乞食の子は、おみよの幸福な身の上をうらやみました。なんで自分も、あの方のように生まれてこなかったのだろう。自分はいつになったら、あんなかわいらしい人形や、おもちゃを持つことができるだろうと、真におみよの身の上をうらやましく思ってながめていたのです。

乞食の子は、いつしか自分というものを忘れてしまって、そのかわいい人形の顔や、姿に見とれてしまったのです。なんというかわいいかわいい人形だろう。まあ、あの人形は私の顔を見て、笑っているのじゃないかしらん。あれ、ほんとうに私の顔を見て笑っている。私はちょっとのまでいいから、お嬢さんにお願いして、あの人形を抱かしてもらおうかしらん。ほんのちょっとのまでいいから、あのかわいい人形を手に取って、よく顔を見たいものだ、ただ一度でいいから顔を見たいものだ。それで、もう私はたくさんだから……そういってお嬢さんにお願いしてみようかしらんと、乞食の子は一人胸のうちで想い煩っていましたが、いやいや、なんでこんな汚いふうをして、ほかの人々から平常乞食の子！　乞食の子！　と、呼ばれているいるものを、なんで、この家のお嬢さんが私に人形を抱かしてくださるものか、かえって、そんなことをいっていやな顔をされるより、黙って、こうしてここで見ていたほうがいいと、小さな胸で想い返しました。そして、乞食の子は、いつまでも垣根のきわに立って、こちらを見ていたのです。

おみよは、人形になにか別のごちそうをこしらえてやろうと思って、外へ青い葉か、色の変わった菊の花を探してこようと思って、

ござから立ち上がりますと、そこの垣根のそばに、哀れな乞食の子がたたずんでこちらを見ていました。まだ年もゆかないのに、そして、こんな寒空なのに、身には汚れた薄い着物を着て、どんなに寒かろうと思いました。おみよは乞食の子より二つ三つ年上であったのです。

乞食の子は、いま、お嬢さんがどこへかいかれて、見えなくなったこのまに、ちょっとそのかわいい人形を抱いてみようと思って、おそるおそる近づいて、なんの深い考えもなしに、人形を手に取りあげてつくづくながめますと、それはかわいい人形でありましたから、

「私はいつもいつもお友だちもなくて、ただ一人でさびしくてならないの。私といっしょに遊んでくれないの。そして、私の仲のよいお友だちになってくれないの。」といって、乞食の子は人形の顔をのぞきました。すると、人形は優しく微笑んで、

「私はお友だちになってあげます。」といったように、乞食の子には思われました。乞食の子は喜んで、かわいい人形のほおに接吻いたしました。

やがてそこへ、おみよは白い菊の花を摘んで帰ってきますと、もう垣根のそばには、乞食の子の影が見えませんでした。そしてござのところへきて、これからごちそうをこしらえて人形にやろうと思いますと、大切の大切の人形の姿が、どこへいってしまったか見えなかったのです。

おみよは大騒ぎをしました。そして、どこへいったろうとあっちこっち探していますと、そこへ近所のおばあさんが通りかかって、なにをそんなに、探しているのかと聞きましたから、人形が見えなくなったのだといいました。

「あ、そんなら、いまあちらへ、乞食の子が人形を抱いて、頭をなでたり、ものをいったりして、夢中になっていったから、それじゃないか。」と、おばあさんは教えました。

おみよは、自分もそれに相違ないと思いましたから、急いでその後を追いましたけれど、もはやその姿は見えなかったのであります。

おみよは、どうしてもその人形のことを忘れることができませんでした。そして、あの哀れな乞食の子をうらめしく思いました。すると、おみよはその晩、不思議な夢を見たのであります。

なんでも、そこは河辺のような木のしげった間に、板や、竹を結びつけて、その上を草や、わらでふいた哀れな小屋の中に、七つか八つになった女の子が、すみの方にぼろにくるまって、あの人形をたいせつに、しっかりと抱いて眠っていますと、寒い寒い星の光が、小屋のすきまをもれてさしこんでいるのでありました。

目が覚めると、おみよはその乞食の子がかわいそうでなりませんでした。けれど、まだ彼女は、人形のことを思いきることができませんでした。明くる日、おみよは学校へいって先生に問うたのであります。

「先生、どんな場合にでも、ものを盗むということは悪いことですか。」

「ものを盗むということは、いちばん悪いことです。」と、先生は目を丸くしていいました。

「先生、もしたいせつなものを盗まれたときはどうします。」と、おみよは聞きました。

「それは学校でですか、家でですか。」と、先生は問い返しました。

「家です。」

「巡査さんに届けて、その悪いことをした奴を縛ってもらうんです。あなたは、なにか盗まれたんですか。」

「たいせつな人形を盗まれました。」

「人形を？　だれが盗んだんです。」と、先生はおみよの顔を見守りました。

「七つか八つになる乞食の女の子です。」と、おみよは答えました。

「乞食の子！」と、先生はいって、しばらく考えていましたが、

「あなたは、巡査さんにいって縛ったほうがいいか、また堪忍してやったほうがいいか、どちらがいいと思いますか。」と、先生は、今度は反対におみよに問い返しました。

「私は堪忍してやったほうがいいと思います。」と、おみよは勇んでいいました。

「あなたは人情のあるよい子だ。そうです、そうしておやんなさい。」と、先生はいって、おみよの頭をなでました。

　不思議にもおみよは、またその晩、同じような夢を見ました。哀れな小屋の中に、七つか八つばかりの乞食の子がぼろにくるまって、しっかりと人形を抱いて眠っているところへ、寒い大空の星の光がさしこんでいるのでありました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　1」講談社
　　1976（昭和51）年11月10日第1刷発行
　　1982（昭和57）年9月10日第7刷発行
※表題は底本では、「なくなった人形《にんぎょう》」となっています。
入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班
校正：ぷろぼの青空工作員チーム校正班
2011年11月2日作成
2012年9月28日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

なくなった人形

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/